

— 2018 年度卒業式より —

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な方との出会いや素晴らしい体験に恵まれ、私の人生においてかけがえのない、豊かな学びを得ることができました。また、時には辛かったことや、思い悩むこともありましたが、友人・家族・先生方が私の心の支えとなり、どんなことも乗り越えることができました。

活水学院は今から140年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なるすべての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「さくら色」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。白色のリボンには、「誠実で素直な心を持ち続けてほしい」との願いを、さくら色のリボンには「人を愛し思いやることのできる人、ぬくもりのある心を持つ人になってほしい」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの2本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、詩編37編23節の御言葉「人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。」をお贈り致します。

この日まで私たちの学びを支えてくださった教職員の皆様、励まし合いながら共に歩んできた友人たち、また、祈りをもって私たちを見守ってくれた家族、そしていつも共にいて導いてくださった神様に感謝致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

岡田 奏（健康生活学部子ども学科 卒業生）

魂譲り〈受け手〉

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりましたこの手桶をお譲り頂きました。

今年は新たに、「誠実で素直な心を持ち続けてほしい」との願いを白色のリボンに、「人を愛し思いやることのできる人、ぬくもりのある心を持つ人になってほしい」との願いをさくら色のリボンに託し、結び加えて頂きました。

わたくしたち在校生は、この2本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で、神様からの限りない愛を受け、先生方やご家族の祈りに支えられながら、励まし合いながら歩んできた友人と共に様々な体験や学びを通して大きく成長され、今日、晴れの日を迎えられました。これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐が試される時や、困難を覚え全てを投げ出したいこともきっとあると思います。しかしどのような時にも、いつも神様は共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいます。どうか愛と希望をもってこれからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

高濱宥樹（音楽学科2年）

一朝の礼拝から 1—

災いを通じて成熟する信仰

ヨブ記 2 章 1～10 節

旧約聖書のヨブ記は「人間に降りかかる不幸や悲劇と神の存在」をテーマに記された書物です。主人公のヨブはウツという地に住み、神を畏れ、悪を避けて生きていました。同時に、彼はたくさんの子どもにも恵まれ、東の国一番の金持ちでもありました。

ある日、サタンが主のもとに現れ、ヨブが神を敬うのは、彼が恵まれた環境におかれているからだと言ったのです。もし彼から財産や健康を奪ってしまえば、彼の信仰は粉々に破壊されてしまうだろうと示唆しました。「そんなに言うなら好きにしたらよい、ただし彼の命だけは奪うな」という許可を神はサタンに与えました。ヨブは財産や子どもを奪われ、ひどい皮膚病に侵されてしまいます。

3人の友人たちがヨブをお見舞いに来ます。友人たちはヨブに対して因果応報説を唱え、悔い改めるように彼に説得します。しかし、ヨブは断固として「こんな災いを受けなければならないようなことは何もしていない」と反論し、自分がなぜ病気になったか、なぜ自分がこのような不幸に見舞われなければならないのか、神様に問い続けました。

最後に神様が出てきて、ご自身がなさった創造の御業について語り、ご自身が人知を超える圧倒的な存在であることをヨブに思い起こさせるのでした。ヨブは、神様との対話の中で、神がすることの理由のすべてを自分が理解できると思っていたことを恥じ、悔い改めます。ヨブのこの悔い改めにより、病気は治り、神はたくさんの財産と子どもをヨブにお与えになりました。

ヨブは自分が災いに巻き込まれた理由を最後まで知らされませんでした。しかし、彼はこの試練を通じ、自分の信仰を「神様には神様の領域があり、人間には人間の領域がある。そして我々人間には神様の行ないや考えについて完全に理解することはできない」という高いレベルに引き上げることができたのです。

英語学科 狩野 暁洋



一朝の礼拝から 2—

Do Not Lose Heart! The Bible Can Help You Study English

創世記 11 章 6 節

You may find English to be a **stumbling block** in your life: something that causes you problems or difficulties. Perhaps you have **fallen flat on your face** when you've tried to use English, and you've made a fool of yourself. Studying a language is a bit of a **two-edged sword**: you have to be prepared to **go the extra mile** if you want to be very good, willing to **rise and shine** every day and work hard, but it can bring you to your **wit's end** with the amount of time it takes. It is a **sign of the times** that graduating students have to make use of English, and the **writing's on the wall** for those who haven't improved their English while in university. It often leaves people with **broken hearts** and their **worlds are turned upside down** when the **powers that be** deny them a good job because they didn't study English properly. Now is the time to **set your house in order** and not look for **scapegoats** or excuses why you haven't studied and think "**woe is me**" when that dream job is out of reach. Never **give up the ghost** and study English every day!

All of the **bold type** words and phrases are used in everyday English speech and are taken from the King James Bible, which was commissioned in 1604. This Bible's translation took six years to complete by scholars from Westminster, Oxford and Cambridge, and the result is still favoured by many because the language is so poetic and beautifully written.

The Bible offers much to us not only spiritually, but also linguistically! There are many more phrases we take from the Bible that you probably already know. The ones here are just **a drop in the bucket**, so studying the Bible can also help your English move from **strength to strength**.

英語学科 Richard Bent

一朝の礼拝から 1—

Welcome strangers for they may be angels.

ヘブライ人への手紙 13 章 2 節

Recently I see many stories in the news regarding the increase of foreign tourists and foreign workers in Japan. The latest population figures estimated 2,660,000 foreigners currently live here, just over 2% of the whole population, which is low compared to most industrialized countries. Moreover, because of the decline in the Japanese birth rate, Japan needs more foreign workers especially in construction, care-work, farming, and service industries. In April immigration laws were changed to allow foreign workers with certain skills to stay for longer, and bring their family to live here with them.

The government recognizes that the foreign workforce will need help especially with finding information about things such as education and health care, as well as help learning Japanese. A law was passed in June to promote Japanese language education for foreign residents, in order to create a “vibrant cohesive society that respects diverse cultures”. Recently an office opened near here to provide multilingual advice to foreign residents, and I know several teachers and students who are providing Japanese language support to children in local schools. In my classes we discuss ways students can help the children and parents they might encounter, for example with issues like school lunches which might contain food that the family cannot eat for religious reasons.

Today’s scripture is from Paul’s letter to the Hebrews, reminding them to welcome strangers in their homes, for who knows, they might be angels. Japanese people are extremely welcoming and hospitable, but sadly there are stories of people being discriminated against because they are foreign, for example when trying to rent accommodation. Many foreign workers who come as Technical Interns find themselves mistreated by their employers, underpaid and over-worked, and tragically a growing number are dying.

In several places in the Old Testament the Bible tells us to accept foreigners as we do ourselves, as the Israelites themselves were once sojourners or foreigners in Egypt. I hope that Japanese people will be able to do that too.

子ども学科 政次 カレン

* ~ *

一朝の礼拝から 2—

喜び楽しんで

コレヘトの言葉3章12節

みなさんは生きることが面倒くさくないでしょうか？私はずっと面倒くさいと思っています。30代初め、ムキになって仕事をしていた時期がありました。そしてワーカホリックとなり、ストレス解消のための暴飲暴食の結果、糖尿病との診断。長崎に赴任してからはアルコールが止まらず、こちらもアルコール依存症のできあがり。その後、重度の鬱病になり、入院する羽目に。結果、一生治ることのない3つの病気を抱えることになってしまいました。その後、治療の過程で、それまでの生き方・考え方を変えていかなければ、また昔の状態に逆戻りしてしまうとことに気づかされました。今は、考え方・生き方を変えるために自分で作った不必要な色々なルールを手放すことを目標に日々を過ごしています。今日も目が覚めて、たまたま気が向いたので大学に出かけて、たまたま気が向いたのでここで今しゃべっているということです。すべては自分が選択し行動することができるということです。そう考えることで、日々の色々な出来事を楽しめるようになりました。

実は、今、ここでしゃべっていることも、原稿を作っていません。頭に思い浮かんだことを話しているだけなのです。それはそっちの方が楽しそうだからという理由に過ぎません。（ということなので、この原稿は、実際にしゃべった内容と、大きくかけ離れている可能性があります。ご容赦ください）

最後に、あるテキストに書かれているお祈りの言葉で締めたいと思います。

「どうか、神さま、笑うことをもう一度教えて下さい。

しかし、神さま、

わたしたちが泣いたことを決して忘れさせないでください」

フレンジインリカバリー著『ACのための12のステップ』より

音楽学科 安川徹

一朝の礼拝から 1—

信じる者にはどんなことでもできる

マルコによる福音書 9 章 23 節

私たちが良く知っている、インドの聖者、マザー・テレサは初めて訪問していたインドで多くの人たちが路上で死んで行く姿を見て衝撃を受けました。彼女はこの状況を見てインドの人々を非難することもできました。インドの政治家たちと論じ合うようなこともできました。しかし、彼女はその状況の中、彼らの生き方を非難することも、インドの人々の価値観や政治を非難することをしませんでした。ただ、神様が彼女に何を求めているのかを考え、何ができるのかを考えました。そして、「死を待つ人々の家」を開設しました。路上の人々を運び、人生の最後の看病を始めました。彼女がしたことは死んでいく者が人間としての尊厳を持って死ぬことができるように、その人々を抱きしめました。彼女は人間を愛する心をもって、神が願うこと、自分でできることを見つけました。そして、できることを実践しました。

私たちはいろんな困ったことの前で何をしていますでしょうか。人を非難したり、苦しい状況に対して不平不満を言ったりしていませんか。イエスは言っています。「『できれば』と言うか。信じる者には、何でもできる。」神が全能な方であることを信じ、お祈りをし、私ができることを探していくこと、これがクリスチャンの生き方であると思います。

生活デザイン学科 2 年 全 恩恵

* ~ *

一朝の礼拝から 2—

よりよい人間関係のために

ガラテヤの信徒への手紙 6 章 2 ~ 10 節

私は、教会学校の奉仕者の学びで『聖書に学ぶ子育てコーチング 境界線～自分と他人を大切にできる子に』という著書が与えられ、「境界線」という言葉に出会いました。「境界線」とは自分の責任と他人の責任の境界線を指します。本日の聖書箇所、「人は、自分の蒔いたものを、刈り取るようになるのです」という御言葉がありますが、時に自分が蒔いたものを刈り取らずに済んでしまうことがないでしょうか。例えば、お金を使いすぎるたびに、貯金が底をつかないようにと母親が口座に入金し、支払いを立て替えてくれるなら、お金を使っている本人はお金の使い方に関する刈り取りをしないで済みます。この母親の行動は、種蒔きと刈り取りの法則を妨げ、「境界線」を持っていない人の行動です。自らの行いの当然の結末から人を助け出してしまうと、行動を起こした本人が苦しむのではなく、他の人が苦しんでしまいます。しかし、自分の責任と他人の責任の領域をはっきりさせる境界線を設定するなら、種を蒔く人に刈り取りも強いることになり、浪費家は、刈り取りの痛みから行動を変えざるをえません。5 節には「めいめいが、自分の重荷を担うべきです」と書かれています。自分の負うべき重荷を他人に担ってもらおうと、無責任となります。無責任に陥らないために「私の境界線がどこにあり、他人の境界線がどこからはじまるのか」をはっきりさせ、自分の境界線内の責任を果たし、他人の境界線内を尊重し踏み込まないことは、よりよい人間関係の構築につながると著者は言います。

神様は、「自分に与えられている重荷を担うことができるように」とイエス様を贈ってくださいました。アドベントの時、自らの行いを振り返り、どこに種を蒔いているのかと思いを巡らせ、「境界線」の道標となり、収穫を見守ってくださるイエス様をお迎えしたいと思います。

宗教センター職員 大曲 喜美子

一朝の礼拝から 1—

大学生活を振り返って

ヨハネによる福音書 15章5節

大学生活が始まって9か月が経ちます。今まで過ごしてきた生活を振り返ってみました。

私は今、日本ルーテル長崎教会に通っています。高校生の時に、福岡にあるルーテル教会で洗礼を受けました。母の母校でもある福岡女学院に通い、初めて聖書を手に取りました。それから6年間、朝の礼拝に目を擦りながら出席する毎日でした。ある時、仲のいい友達が教会へ誘ってくれ、そこが私にとって教会生活の始まりでした。最初は「教会出席レポートもかけるし丁度いいや」という軽い気持ちで行きました。そこは、ルーテル甘木教会という私が籍を置いている教会です。教会員の方に暖かく迎えられ、主日礼拝に出席してから1週間を始めるのが当たり前となっていきました。今では、その教会との繋がりは、家族同然となりました。そうして、教会生活を送っていく中で、今の私の専攻楽器であるパイプオルガンに出会いました。毎朝の礼拝は、オルガンの奏楽で始まり奏楽で締められる。心のバランスを整えてくれるような気がしていました。当時音楽科で、ピアノを学んでいたのですが、オルガンを弾く機会が何度かあり、自分の所属教会でも奏楽を頼まれるようになりました。そこから一気にオルガンを学びたいという気持ちになり、この大学で今の私があると思っています。

福岡女学院の聖句でもある、「わたしは葡萄の木、あなたがたはその枝である。」この聖句のとおり、一つの枝がこうしてさらに枝分かれして実りました。今の時代、LINEやFACEBOOK、Instagramなどのソーシャルメディアによって誰かと繋がっている感覚に陥りやすいですが、この聖句からはインターネットの有無に限らずイエス・キリストは私たちが繋がっているという安心感をもたらしてくれるようだと感じます。私は、今までと同じようにこれらも、この葡萄の木を大事に育てていこうと思います。

音楽学科1年 別府 碧美

* ~ *

一朝の礼拝から 2—

「タラント」のたとえ

マタイによる福音書 25章14~30節

今日の聖書はイエス様の譬え話です。僕（しもべ）の力に応じて5タラント、2タラント、1タラントを預け主人は旅に出かけます。早速に5タラント、2タラント預かった僕は商売をして倍に増やしますが、1タラント預かった僕は土の中に埋めておきました。日がたつて主人が戻ってきて倍に増やした僕は称賛され、1タラントの僕は悪い僕だと怒りをかうのです。主人というのは神様で、僕は私たちでしょうか。タラントはお金の単位ですが、私たちに与えられた賜物、才能だということです。

私はタラントをどうして平等に与えられないのだろうかと思います。同じように下さってもいいものだと思うのですが、ここがポイントです。生まれながらの才能、すぐれた能力を持った天才といわれる人もたくさんいますし、また反対に障害を持って生まれてくる人もいます。普通に五体満足に生まれていても、日常の生活のなかで自分と隣の人を比較して私はだめだと思うことも、優越感を感じることもしばしばあると思います。

平等に与えられていない。そうではなく、平等に愛されているのです。神様に同じように愛されているのだと気づきました。だから力に応じて、あなたに合うように与えて下さっている。もしかしたら、自分にはないと思っている力が神様には、力があると思ったださっているかもしれません。私なんか1タラントしかないと思うことがないでしょうか。1タラントの僕のように文句ばかり言って怠けていないでしょうか。

たとえ1タラントしかなくてもいただいている賜物。もったいないことです。私たちそれぞれに応じたものを下さっています。他の人と比べる必要はないのです。一人一人のかけがえのない人生。神様から愛されている私たちなのです。いただいているタラントに感謝し、そしてその賜物をいかして、隣人のために役に立てていくようにしたいものです。

宗教センター職員 西村実千代